

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370803

研究課題名(和文) 高度経済成長と戦後日本の総合的歴史研究 高度成長の社会史

研究課題名(英文) The Comparative Historical Study of the Postwar Japan and the High Economic Growth: the Social History of High Growth

研究代表者

庄司 俊作 (Shoji, Shunsaku)

同志社大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：70130309

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：高度経済成長期を中心に戦後日本の政治、経済、社会の歴史研究を行った。3年間を通して、月1回のペースで研究会を開催し、研究報告とともに関連する研究動向、研究成果の合評会等を積み重ねた。研究分担者は各分担テーマで資料調査、現地調査を行い、研究成果を発表してきた。3年間で独自に著作を刊行した分担者も少なくない。国際シンポジウムと学会シンポジウムを各1回のほか、市民向けの公開講演会を2回開催した。2016年度、3年間の研究成果を踏まえ、研究叢書『戦後日本の開発・高度成長と民主主義 地域からの照射』(仮題)を刊行する。

研究成果の概要(英文)：We have done the historical research of politics, economy and society of the postwar Japan at the center of the rapid growth period. We took workshop once a month in the past three years developing the research and reaped the rich harvest from the study. Each member has done the field research and the resource research in each theme, and presented the study results. Not a few members have published the books in these three years. Also, we held the international symposium, the academic symposium and two public lecture for the citizen. In 2016 we will publish "The development, rapid growth and democracy of the post war Japan: the irradiation from the region" (temporary title) as the study result in these three years.

研究分野：近現代日本経済史

キーワード：戦後日本 高度経済成長 開発 地域 政府 都市と農村 社会運動 周縁性

### 1. 研究開始当初の背景

明治維新の1868年から本研究を開始した2013年までの約150年を1945年で区切ると、後期の戦後は前期の戦前・戦時と年数はあまり変わらないのに、歴史研究は大きく立ち遅れているという現実があった。確かに経済学や政治学では高度経済成長期を中心に戦後日本の経済や政治を分析した研究が多く存在した。21世紀に入って、戦後を扱う経済史や政治史の研究者の活躍が目立つようになった。戦後史に関する講座ものも次々に出版されるようになった。しかし、一次資料や現地調査にもとづく戦後の本格的歴史研究は十分ではなく、その活性化が求められていた。こうした状況を少しでも克服し、高度成長と戦後日本に関する独自の歴史像を提起したいと考え、関西の若手戦後史研究者と共同研究の組織を立ち上げた。

研究代表者は先に戦後大学生協史を組織し、共編著『大学の共同を紡ぐ 京大学生協』(日本生活協同組合連合会、全477頁、2012年)を刊行した。同成果を踏まえ、広い視点から戦後日本の歴史研究を行いたいという個人的問題意識も研究を開始する動機にあった。

### 2. 研究の目的

高度経済成長は戦後改革と並ぶ戦後史の二大転機である。高度経済成長期の経済発展と社会変動の関連を明らかにすることは、現在の国のかたちと社会を読み解くうえで不可欠である。そこで、現在の視点から戦後日本と高度経済成長について総合的な歴史研究を行い、日本戦後史の見直しを図る。「日本は経済大国である。しかし、豊かな国ではない」として暉峻淑子『豊かさとは何か』が出版されたのはバブル絶頂期の1989年であった。こうした見方は今や社会の常識になった。それから20年余、限度を超える格差社会の進展に加え、ついに「文明史の転換」ともいべき3.11を受け、日本社会の崩壊、国民の持続的生存の危機さえ現実味を帯びるようになった。これが戦後70年を超えた今の日本のすがたである。なぜ日本はこのような社会になったのか。本研究は戦後、とくに高度経済成長期日本の研究を通して、この問題を歴史から探らうとするものである。

### 3. 研究の方法

本研究は以上の問題意識に立つ戦後日本と高度経済成長に関する総合的な歴史研究である。総合的とは、第1に、研究の方法として歴史の全体性を重視する。研究の性格を考慮すると多様なテーマについて研究が求め

られるが、研究の現状とアウトプットを重視し、研究の対象をある程度限定せざるを得ない。第2に、研究の学際性である。日本近現代史を中心に多様な分野の研究者を組織した。本研究は3年間の予定で実施し、研究成果を著作にまとめ刊行する。研究目的の達成のため、関西エリアの各分野実績のある多様な研究者を集めた。問題意識を共有する研究者の報告・討論の場である定例研究会(研究合宿)を重視する。研究会を通して高いレベルの共同研究をめざし、研究成果につなげる。研究会は歴史の証言者の記録づくりの場でもある。斯界の研究発展に資するため、ヒアリングを系統的に実施し、資料価値の高い聞き書き記録を蓄積する。本研究では現地調査が不可欠である。研究成果は、研究拠点である同志社大学人文科学研究所(以下、人文研という)の機関誌に順次発表していく。人文研主催の国際学術シンポジウムや公開講演会等の事業に積極的に参画する。

### 4. 研究成果

#### (1) 2013年度

研究組織を立ち上げて1年目。諸事、順調にスタートを切ることができた。第1に、研究代表者による研究の進め方の提案とそれを受けた議論を行った第1回の研究会以降、研究会を月1回のペースで開催した。研究分担者等が順次報告、年間を通して10回の研究会をかぞえた。第2に、2013年人文研主催国際学術シンポジウムにおいて研究分担者3人がコーディネーター、報告者を務め、「日本の『戦後史』と東アジア」を開催した。第3に、研究代表者が2013年度日本村落研究学会テーマセッション(テーマ:村の再編)のコーディネーターを務めた。第4に、研究メンバーが多くの研究成果を発表した。第5に、高度経済成長期を中心として戦後史の文献・資料を系統的に収集した。

#### (2) 2014年度

研究組織が始動して2年目。研究代表者を中心に本年度の研究成果をまとめると以下の通りである。第1に、昨年度に引き続き研究会を月1回のペースで開催する一方、秋には「市民化する住民、開発と公害を生きる」というテーマで公開講演会を開催した。第2に、研究会では女性史研究者である井上とし氏を招き、その著書をめぐって討論を行い、記録を人文研機関誌に発表した。第3に、6月の研究会における広原報告を発展させ、公開講演会を開催し、記録を人文研ブックレットとして刊行した。第4に、その他の研究成果としては、人文研機関誌に「戦後と高度成長を穿つ」として特集号を組み、3本の論文

等を掲載した。なお、同号には 2013 年開催の前記国際学術シンポジウム「日本の『戦後史』と東アジア」の各報告も掲載した。第 5 に、コーディネーターとして研究代表者は日本農業史学会シンポジウム「農家・農村の戦後と高度成長を穿つー移動、女性、高齢者」とのテーマでシンポジウムを開催した。このシンポジウムでは研究分担者 1 名が報告した。第 6 に、研究代表者がコーディネーターを務めた前記 2013 年度日本村落研究学会大会テーマセッション「村の再編」の記録を『年報村落社会研究 50 市町村合併と村の再編 - その歴史的变化と連続性』(農山漁村文化協会、2014 年)にまとめ刊行した。第 7 に、研究分担者も各分担テーマで研究を進め、著作等で研究成果を発表した。第 8 に、引き続き高度成長期を中心に戦後史の文献・資料を系統的に収集した。

### (3) 2015 年度

研究期間の最終年度。第 1 に、3 年間を通して月 1 回のペースで研究会を開催した。第 2 に、研究分担者等は各分担テーマで資料調査、現地調査を進め、研究成果を発表してきた。研究拠点である同志社大学人文研機関誌を中心に論文等を発表するとともに、3 年間でそれぞれ著作をまとめ刊行したメンバーも少なくない。第 3 に、研究組織で 2015 年度日本農業史学会大会シンポジウムを開催した。第 4 に、人文研第 87 回公開講演会を開催した。第 5 に、研究分担者等は積極的に研究成果を発表した。第 6 に、引き続き高度成長期を中心に戦後史の文献・資料を系統的に収集した。以上のうち本年度の主要な研究成果としては、『社会科学 特集 戦後と高度成長を穿つ(2)』、『沖縄と村から見る戦後の日本』(人文研ブックレット 52、第 37 回公開講演会、2016 年 2 月)、「2015 年度日本農業史学会大会シンポジウム：農家・農村の戦後と高度成長を穿つ」『農業史研究』第 50 号、2016 年 3 月)が挙げられる。

なお、2016 年度、これまでの研究成果を踏まえ、人文科学研究所叢書として『戦後日本の開発・高度成長と民主主義ー地域からの照射』(仮題)を刊行する。その概要、章別構成は次の通りである。

序章 課題と方法	庄司 俊作
第 1 章 高度成長都市神戸市の軌跡	広原 盛明
第 2 章 エネルギー革命と地域開発	小堀 聡
第 3 章 高度経済成長と消費生活の変化	

尾崎(井内) 智子

第 4 章 戦後失業対策事業と失対労働者運動	杉本 弘幸
第 5 章 京都民主戦線についての一試論	福家 崇洋
第 6 章 高度経済成長とうたごえ運動	河西 秀哉
第 7 章 戦後改革と高度経済成長のあいだ	庄司 俊作
第 8 章 村の教師と村づくり	櫻井 重康
第 9 章 沖縄の基地と女性	桐山 節子
第 10 章 沖縄における観光業の変遷	櫻澤 誠
あとがき	庄司 俊作

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](30)

庄司俊作、戦後改革と高度経済成長のあいだ、同志社大学人文科学研究所高度成長史研究会研究報告ディスカッションペーパー、査読無、第 1 号、2015、1 - 28

庄司俊作、書評『近現代日本の村と政策』、史学雑誌、査読無、第 152 巻第 2 号、2016、97 - 105

庄司俊作、豊かな時代と高度経済成長を考える、社会科学、査読有、第 45 巻第 3 号、2015、165 - 175

高度成長史研究会(研究代表者庄司俊作)、女性史研究者・井上とし氏を囲んで、社会科学、査読有、第 44 巻第 3 号、2014、63 - 92

庄司俊作、生協のガバナンスと地域・組合員、くらしと協同増刊号、査読無、2014、25 - 33

庄司俊作、小さな「百貨店」と村、くらしと協同、査読無、2013 春、34 - 39

杉本弘幸、戦後都市社会政策と女性失対労働者、社会事業史研究、査読有、第 49 巻、2016、51 - 71

杉本弘幸、京都勤労者演劇協会事務局資料

目録、佛教大学歴史学部論集、査読無、第5巻、2015、111 - 132

杉本弘幸、ヨイトマケの歌・ニコヨンの歌、社会科学、査読有、第44巻第3号、2014、17 - 32

杉本弘幸、戦後失業対策事業と失対働者運動の出発、世界人権問題研究センター研究紀要、査読無、第18号、2013、69 - 103

櫻澤誠、米軍統治期の沖縄保守勢力と「島ぐるみ」：「オール沖縄」につながる水脈、現代思想、査読無、第44巻第2号(臨増)、2016、114 - 119

櫻澤誠ほか、インタビュー川崎・東京における沖縄返還運動：渡久山長輝氏に聞く、ノートル・クリティーク：歴史と批評、査読無、第8号、2015、22 - 61

櫻澤誠、沖縄戦後史研究の現在、歴史評論、査読有、776号、2014、52 - 62

櫻澤誠、沖縄復帰前後の経済構造、社会科学、査読有、第44巻第3号、2014、33 - 46

福家崇洋、1950年前後における京大学生運動(下)、京都大学文書館紀要、査読無、第14号、2016、1 - 22

福家崇洋、1950年前後における京大学生運動(上)、京都大学文書館紀要、査読無、第13号、2015、1 - 25

福家崇洋、「非国民」の憂鬱、文明構造論、査読無、第10号、2014、1 - 41

福家崇洋、京都民主戦線についての一試論、人文学報、査読有、第104号、2013、167 - 206

河西秀哉、敗戦後における昭和天皇の「日本」意識、Juncture：超越的日本文化研究、査読無、第7号、2016、30 - 37

河西秀哉、敗戦直後の天皇制の危機とマスメディア、Juncture：超越的日本文化研究、査読無、第6号、2015、86 - 99

①河西秀哉、戦争責任論と象徴天皇制、歴史学研究、査読有、第937号(増刊)、95 - 103

②河西秀哉、日本近現代における売買春のイ

メージと実態、女性学評論、査読無、第28号、2014、27 - 46

③原山浩介、資料と展示：震災をめぐる想像力の「収斂」に抗するために、歴史学研究、査読無、第929号、2015、48 - 51

④原山浩介ほか、越境する「日本史」：欧米にある日本関係資料の研究、総研大日本歴史研究専攻(共同刊行国立歴史民俗博物館)、査読無、2015、77P

⑤安岡健一、近代日本農業・農村に関する歴史研究の動向、歴史評論、査読有、第787号、2015、38 - 49

⑥安岡健一、高度成長期地域社会における高齢者の研究、農業史研究、査読有、第50号、2015、2 - 16

⑦安岡健一、引揚者と戦後日本社会、社会科学、査読有、第44巻第3号、2014、3 - 16

⑧安岡健一、「分村」の戦後史：下伊那地域を事例に、信濃、査読有、第66巻第10号、2014、731 - 750

⑨西川祐子・庄司俊作、杉本星子他編『京都発！ニュータウンの「夢」建てなおします一向島からの挑戦』をめぐって、社会科学、査読有、第45巻第3号、2015、181-222

⑩西川祐子、続「古都の占領」：忘却に抗して、アリーナ、査読無、第15号(別冊)、2013、5 - 12

〔学会発表〕(5)

庄司俊作、主旨と論点、第61回日本村落研究学会テーマセッション、2013年11月3日、武生パレスホテル、福井県越前市

庄司俊作、座長解題、2015年度日本農業史学会シンポジウム、2015年3月27日、東京農工大学

安岡健一、高度成長期地域社会における高齢者の研究、2015年度日本農業史学会シンポジウム、2015年3月27日、東京農工大学

河西秀哉、戦争責任論と象徴天皇制、2015年度歴史学研究会近代史部会、2015年5月

23日、慶応義塾大学三田キャンパス、

〔図書〕(20)

庄司俊作編著、農山漁村文化協会、年報・村落社会研究 50 市町村合併と村の再編：その歴史的变化と連続性、2014年、322

庄司俊作編著、京都自治体問題研究所、人間的な経済社会をめざして、2014、107

富山一郎、インパクト出版会、流着の思想、2013、375

小川原宏幸他、岩波書店、薩摩・朝鮮陶工村の400年、2014、447

小川原宏幸他、有志社、講座東アジアの知識人第1巻、2013、362

杉本弘幸、思文閣出版、近代日本の都市社会政策とマイノリティ：歴史都市の社会史』、2015、392

櫻澤誠、中央公論新社、沖縄現代史、2015、366

河西秀哉、吉川弘文館、皇居の近現代史、2015、227

福家崇洋、ミネルヴァ書房、満川亀太郎、2016、383

福家崇洋他、法律文化社、戦後日本思想と知識人の役割、2015、403

安岡健一、京都大学出版会、「他者」たちの戦後史、2014、350

原山浩介他編著、東京堂出版、アメリカ・ハワイ日系社会の歴史と言語文化、2015、290

西川祐子他編、昭和堂、京都発！ニュータウンの「夢」建てなおしますー向島からの挑戦、2015、237

西川祐子他、平凡社、戦後史再考、2014

西川祐子他、同志社コリア研究センター、日記が語る近代、2014、398

広原盛明他、御茶の水書房、町内会の研究増補版、2013、612

今井小の実他、ミネルヴァ書房、一番ヶ瀬社会福祉論の再検討、2013、262

今井小の実他、ミネルヴァ書房、アジアの中のジェンダー、2015、273

伊藤淳史、京都大学出版会、日本農民政策史論、2013、340

藤井祐介・小堀誠・広原盛明、人文研ブックレット NO.48、市民化する住民、開発と公害を生きる、2015、84

②桐山節子・櫻井重康、人文研ブックレット NO.52、沖縄と村から見る戦後の日本、2016、75

注

以上は、研究期間（平成25～27年度）の研究成果である。

雑誌論文、学会発表、図書とも主要なものに限り一部を挙げている。従って、実績報告書におけるとは一致しない。

雑誌論文、学会発表は研究代表者と研究分担者の研究成果に限っており、連携研究者と研究協力者の雑誌論文等は省いている。

連携研究者と研究協力者に関しては、図書のみを挙げている。連携研究者と研究協力者は人文科学研究所叢書の執筆予定者で、2016年4月開始の新研究会のメンバーである。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

庄司 俊作 (SHOJI, Shunsaku)

同志社大学・人文科学研究所・教授

研究者番号:70130309

### (2) 研究分担者

富山 一郎 (TOMIYAMA, Itiro)

同志社大学・グローバルスタディ研究

科・教授

研究者番号:50192662

小川原 宏幸 (OGAWARA, Hiroyuki)

同志社大学・グローバル地域文化学部・

准教授

研究者番号:10609465

井上 史 (INOUE, Fumi)  
同志社大学・人文科学研究所・嘱託研究  
員

研究者番号：60649424

西川祐子 (NISIKAWA, Yuko)  
京都文教大学・人間学研究所・客員研究  
員

研究者番号：50183538

原山 浩介 (HARAYAMA, Kosuke)  
国立歴史民俗博物館・准教授

研究者番号：50413894

河西 秀哉 (KAWANISI, Hideya)  
神戸女学院大学・文学部・准教授

研究者番号：20402810

櫻澤 誠 (SAKURAZAWA, Makoto)  
大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90531666

杉本 弘幸 (SUGIMOTO, Hiroyuki)  
佛教学部・社会福祉学部・講師

研究者番号：10625007

福家 崇洋 (HUKE, Takahiro)  
富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：80449503

安岡 健一 (YASUOKA, Kennichi)  
大阪大学・文学部・特任講師 (常勤)

研究者番号：20708929

### (3) 連携研究者

広原 盛明 (HIROHARA, Moriaki)  
京都府立大学・名誉教授

研究者番号：90046475

今井 小の実 (IMAI, Konomi)  
関西学院大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：20331770

伊藤 淳史 (ITO, Atusi)  
京都大学・(連合)農学研究科(研究院)・  
准教授

研究者番号：00402826

小堀 誠 (KOBORI, Makoto)  
名古屋大学・経済学研究科(大学院)・

准教授

研究者番号：90456583

### (4) 研究協力者

櫻井 重康 (SAKURAI, Sigeyasu)

桐山 節子 (KIRIYAMA, Setuko)